



前橋市総合教育プラザ

幼児教育センターだより

第79号 令和4年8月発行

保護者と同じ目線で子どもを見る

幼児教育アドバイザー 田子 文子

保育者と保護者が同じ目線で子どもについて語り合える関係づくりが求められています。同じ目線で見るとはどういうことで、それが子どもの成長にどのように繋がっていくのでしょうか。

ある園の5歳児クラス、E児の母親から友達と遊べてないのではないかという相談がありました。

確かにE児は昆虫好きで友達との関りは少ない。先生は、その場では「自分の興味のあることで夢中で遊んでいるので、今はそれを見守ることが大切ではないか」と伝えた。けれども、改めてE児の興味の先を共にしようと考えた。数日後、桜の木の下にハチの死骸を発見したE児は「オオスズメバチの足だ!!」「危ない、刺されたら大変だ」と言う。「知らない友達もいるかもね」という先生の提言を受け、E児は昼食前に、自分で描いたハチの絵を見せながらクラスのみんなに「刺されたら大変です。気を付けてください」と話した。そして、「小さい組にも伝えたい方がいいよ」という他の子の考えを受けて3・4歳児クラスに知らせに行った。先生は、自分の描いた絵を持って3・4歳児のクラスに向かうE児の後ろ姿に感動し、母親にその様子を伝えた。

保護者の思いを受け止めることに重圧を感じることもありますが、親だから見える子どもの姿があります。その受け止めが子ども理解を深めるきっかけにもなります。保護者の思いを「受け止める」ことは、その思いを何でも「受け入れ」保護者の思い通りにするというものではありません。自分の中にその思いを「受け止め」て、改めてこれまでの子ども理解や援助の在り方を省察し適切な援助を生み出す手がかりにすることです。その行為はE児だけではなく他の子どもの成長にも繋がっていきます。

遊びを中心とした保育を進めるために、子ども理解についてすでに園内の保育者同士で連携されていると思いますが、そこに保護者の視点も入れることで、さらに理解が深まるものと思います。

次は、3歳児のクラスです。

その日避難訓練があり、間近で見た消防自動車をみんなで描きクラスに展示した。降園時F児の母親がその絵を見て「うちの子だけどうして、みんなみたいに消防自動車が描けないのでしょうか」と尋ねた。F児の画用紙には大きな丸がいくつも赤いクレヨンで描かれている。先生は、F児が消防自動車の周りを何度も回って見ていたこと、大きなタイヤに驚いて夢中で描いたこと、幾重にも重なる丸の中に描きたい思いが力強く表現されていること、この体験が描くことの始まりであると伝えた。

保護者は時として、できるか否か、でき映えなど目に見えることを気に留め、子どもの心の中が見取れないことがあります。目の前にいる子どもをしっかりと見て、その言葉や行動から子どもの思いを読み取り、成長していく姿として保護者に伝えることは保育者の大切な役割です。